

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0991000118		
法人名	医療法人社団 湘風会		
事業所名	グループホーム ピオニー		
所在地	栃木県大田原市山の手2-13-31		
自己評価作成日	平成30年7月31日	評価結果市町村受理日	令和3年3月10日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/09/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 アスク
所在地	栃木県那須塩原市松浦町119-189
訪問調査日	令和2年8月26日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「「ゆっくり」「いっしょに」「楽しみながら」一人一人のその人らしさを大切に生活支援に努めます。」を事業所理念として、御入居者様一人一人のペースに合わせて一人一人に寄り添って一人一人が楽しみを持ってその人らしく生活できるように支援しています。コロナウィルス感染防止のため今年度は地域のほとんどの行事が中止になり職員・御家族様との外出は自粛しておりますが、毎月季節の花を活けたり、車中からあじさいを鑑賞したりして、季節の移り変わりを感じていただけるように支援しております。室内でも楽しく過ごせるように、職員と一緒にできる仕事(洗濯物たたみ・食器ふき等)をやっていただいたり、それぞれの趣味を行うためのお手伝いをさせていただいております。現在御入居者様が御家族様と話がしたい時は、職員がお手伝いをして電話でお話していただいております。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

元割烹料理店をリノベーションした建物の二階(一階は小規模多機能型居宅介護事業所)に位置し、死角がなく職員の目が行き届きやすい間取りになっている。職員は、利用者がその人らしくできるだけ長く現状を維持できるよう、常に早め早めの対応を取るよう心掛けて生活支援をしている。また、利用者が自分自身を表現したり、毎日の生活の中でより質の高い楽しみを体験できる機会を作るよう心掛けている。職員の定着率が高く、定例会議に限らず職員間のコミュニケーションが柔軟に取られていて、チームワークが随所に発揮されて温かい雰囲気のあるホームである。特に、ケアマネージャーが日頃から情報収集した利用者の状況について、詳細に手書きして家族に手渡していて、利用者がかかりつけ医を受診する際にその手紙が大きな手助けとなっており、医療との連携がうまく取れている。新型コロナウィルスの感染を防止するために、事業所としては安全第一で外出や外部との接触を制限しているが、職員が持てる力を発揮して得意な楽器を演奏するなど、利用者が少しでも多く楽しめるように工夫している。

Ⅴ. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「ゆっくり」「いっしょに」「楽しみながら」を事業所理念とし、管理者と職員がそれを共有できるように玄関内やフロアに掲示している。昨年4月に事業所内研修で理念を確認している。	事業所理念が、職員手作りの壁面飾りでリビングに掲げられている。事業所研修として、年度初めに職員全員で理念を再確認し、日常のケアにどう結びつけていくか話し合っている。勤務年数が多い職員も多いことから理念が浸透しており、利用者に優しく寄り添い、食事それぞれのペースでゆっくり食べられるように取り組んでいる様子が窺えた。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に加入し、回覧板を通して地域の情報を得ている。昨年は地域の文化祭に参加したり、事業所の秋祭り「湘風祭」への参加を地域住民に呼びかけ参加していただいている。また、年に2回行う消防訓練の際、近隣住民の協力を得ている。	開設から10年以上となり、住民の理解も深まっていて、利用者が地域の文化祭に参加したり、事業所の秋まつりには地域住民がたくさん訪れている。また、地元のお祭りで屋台(みこし)が事業所の前に止まってお囃子を披露してくれたり、避難訓練に近隣住民が数人加わるなど、良好な関係を築いている。しかし、今年度はコロナウイルスの関係で、全く交流ができない状態が続いている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	年に一度、施設をオープンにした秋祭りを開催し、地域の方々に施設内に展示された作品を見ていただいたり、職員の認知症の方への支援を見ていただき、理解を得ている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では①入居者数・介護度・年齢・地域②利用状況③活動実績・行事の報告を行っている。委員から、地域の行事について事前に詳しい日程を教えてもらっている。身体拘束適正化委員会では身体拘束の廃止に関する勉強会を行っている。	市担当課職員、地域包括支援センター職員、地域住民代表、民生委員、利用者家族に集ってもらい、併設の小規模多機能型居宅介護事業所と合同で年6回運営推進会議を開催している。事業所の運営状況を説明するとともに、地元の情報を伝えてもらったり、事業所の行事等の内容について意見を出してもらい、運営の向上に努めている。今年度は、感染予防のため書面審理という形で、実施している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市から集団指導の資料を送っていただいたり、市職員に運営推進会議等の場で運営の指導を受けている。今年4月からはコロナウイルス感染防止のため会議は紙面開催として、委員にアンケートを配り意見を集めている。	市担当職員は毎回運営推進会議に参加している。様々な情報を伝えてもらったり、運営上の助言や指導を受けるなど、良好な関係を築いている。今年度は、電話連絡や書面のやり取りという方法で連携を図っている。	

グループホーム ピオニー

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	今年5月に事業所内研修で身体拘束廃止の指針を確認して、身体拘束による弊害を理解するとともに、個人尊重のケア・見守り・声掛け・寄り添いの実施により、身体拘束のない支援に努めている。契約時やサービス担当者会議で身体拘束の廃止について家族に説明している。今年6月の事業所内研修では、「身体拘束廃止に取り組んだ個別事例」を検討した。	事業所研修で、身体拘束廃止の指針を学ぶとともに、「他事業所の身体拘束廃止に取り組んだ事例」を元に職員全員で学習している。事業所研修終了後は、必ず全員にレポートを提出してもらうなど、研修効果を高める取組も行っている。今まで、身体拘束が必要とされる例はなかったが、職員は日常のケアの中で身体拘束に当たる対応がないか、常に気を配っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止関連法については、今年8月に事業所内研修で学ぶ予定。介護施設としては家族の介護負担を軽減して、家族による虐待が行われないように支援している。また施設での対応が入居者にとって苦痛なものとなっていないか常に確認している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	今年7月の事業所内研修で日常生活自立支援事業・成年後見制度について学んだ。これらの制度利用が必要となった時には、学んだことを活用したい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約書・重要事項説明書を基にグループホームの役割や介護保険制度について十分に説明している。入居者が新たな生活を確立するために、本人や家族の理解・納得を得たうえで契約を締結している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	介護計画の作成に当たりサービス担当者会議を開催して、入居者の家族に出席していただき意見や要望を把握している。また、家族が利用料金支払いや病院受診等で来所された際も話し合う時間を作っている。また、管理者が苦情処理担当となり、いつでも対応できるようにしている。	利用者からは、日常の生活の中で要望や意見を聞くようにしている。家族からは、面会時やサービス担当者会議に出席したときに、意向や要望を開きとるように努めている。新型コロナウイルスの感染が拡大してからは家族の面会は全面的に断っていたが、最近は短時間に限り玄関先で面会してもらうようにしたので、家族の意見や要望を把握しやすくなっている。出される意見や要望は利用者のケアに関することが多いが、運営やケアの見直し、介護計画の内容に反映するよう取り組んでいる。	

グループホーム ピオニー

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	栃木支部が集まる管理者ケアマネ会議、グループホームピオニー職員の定例会議が毎月行われて、職員の意見や提案を代表者や管理者が聞く機会となっている。	毎月職員の定例会議を開催していて、職員からは運営やケアの改善等について、積極的に意見が出されている。職員の意見を受けて、浴槽の外側2か所の手すりのほかに、立ち上がりの難しくなっている利用者のために、浴槽の内側にも手すりを増設した例がある。施設長は原則会議に出席して話し合いを行っているが、欠席の場合は会議結果を閲覧するほか、重要と思われる事項については管理者が直接伝えるようにしていて、その後の運営改善につなげている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	各職員がやりがいを感じ、向上心を持って働けるよう、個々の能力や実績・勤務状況を考慮した給与を支給している。賞与は管理者・施設長が査定を行った上で支給している。また勤務表は個人の要望をできるだけ取り入れて作っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	今年度はコロナウィルス感染防止のため事業所外の研修はほとんど中止となっているが、事業所内研修は毎月実施している(書面開催)。また外部研修が開催されるようになれば研修の周知を図り、多くの職員が参加できるようにしたい。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	今年度はコロナウィルス感染防止のため市の介護サービス事業所連絡協議会の部会・ケアマネ連絡協議会の研修会・法人栃木支部の合同研修等は中止になっている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に、本人や家族に会って聞き取りを行い、本人の状態や要望等をうかがって、状況にあった支援ができるよう努めている。職員は本人の思いを傾聴することを心掛け、本人が安心できるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前や契約時に家族から不安や要望を聞く機会を作り、関係作りに努めている。また、入居後も家族の来訪時に本人の現況をお知らせし、家族の意向や思いに耳を傾け、安心していただけるよう心掛けています。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	インテーク時に本人・家族の思いや意向の聞き役となり、共に解決策を見い出せるよう話しやすい雰囲気作りを心掛けています。		

グループホーム ピオニー

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	これまでの生活の中で得意とされていた物（歌・短歌・生け花）を教えていただくなど、人生の先輩として尊重し、話に耳を傾け、共に支え合う関係を築いていけるよう努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族の来訪時に本人の現況を報告したり、毎月の請求書と一緒に写真入りの手紙を送ることで本人の様子を報告している。必要に応じてケアマネが連絡事項等を同封している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	遠方の家族でも月1回は利用料支払いを兼ねて来所していただいている。今年度はコロナウィルス感染防止のため面会時間を制限しているが、家族が気兼ねしないで面会できるように支援している。また、なじみのあるかかりつけ医の受診を継続している。	毎月の利用料は口座振り込みにも応じているが、支払いを兼ねて面会に来る家族もいる。利用者の高齢化もあり、友人や知人、以前住んでいた家の近所の方等の面会はほとんどなくなっている。隣接の小規模多機能型居宅介護事業所を利用してグループホームに入居した方の場合、利用者仲間が時々顔を出すこともあったが、現在は交流を遠慮してもらっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	洗濯物たたみや食事の準備・後片付けが共同で行えるよう支援したり、気の合う方同士が近くに座れるよう配慮している。共同生活の中で関わり合い・支え合いの大切さを感じていただき、職員が適度に介入することで、孤立せずに交流が深まるように支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居後も必要に応じて相談や支援に努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日頃の生活から、本人の表情や仕草などを観察し、興味の対象、好き嫌いや思いなどを探り、本人が心地良く生活できるように支援している。	全体的に介護度が高くなく、ほとんどの利用者が意思疎通ができるので職員は利用者に声掛けをして、希望や意向を把握するよう努めている。意思疎通の難しい方は、表情や態度等から、思いや希望を推測し、できるだけ過ごしやすい状況を作るよう取り組んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居までに必ず生活歴、得意だったことやこだわり、さらには住まいの間取りなどを把握して、入居後の生活に安心感をもてるように関わり合ったり環境を整えたりしている。		

グループホーム ピオニー

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員一人ひとりが、心身の状態や有する能力等の観察に努め、細かな変化の状況も共有するよう申し送りと記録を徹底している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要の関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人がその人らしく安心して暮らすための課題とケアのあり方について、本人・家族・職員と話し合うためのサービス担当者会議や定例会議で検討している。そこで、それぞれの思いや意見が反映されるよう介護計画を作成している。	介護計画作成担当者は、利用者・家族の意向や要望を聞き取り、サービス担当者会議で職員からの意見をもらい、モニタリング結果を参考にして、総合的に判断して介護計画を作成している。利用者の生活状況等の大きな変化があった場合は、速やかに計画の内容を見直し、利用者が常に快適に過ごせるよう努めている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別経過記録や日誌、申し送りノート等によって情報が共有され、日々のケアの修正や介護計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	今年度はコロナウィルス感染防止のため、家族との外出は自粛している。6月にあじさい見学のためドライブに行った(車中から見学)。施設内でも季節を感じられるように行事や過ごし方(節分豆まき・七夕会・季節の歌・生け花)を工夫している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	今年度はコロナウィルス感染防止のため、地域のボランティアとの交流や出張理容師などの利用・地域の祭り等への参加は自粛している。施設内でも楽しみのある生活が送れるように行事や過ごし方を工夫している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居前からの主治医に継続して診ていただいている。通院の付き添いは基本的には家族が行うが、往診・訪問診療では看護師の資格を持つケアマネが同行し状態を報告するなど主治医との連携を深めている。ケアマネが受診に同行できない場合はケアマネが事前に病院に電話で報告したり当日ケアマネの手紙を渡したりして、確実に主治医に入居者の状態が伝わるようにしている。	個別に契約している訪問診療や往診を月に1回受けている利用者がいる。また、家族が対応してかかりつけ医に受診する際は、ケアマネージャーが利用者の日頃の様子や病状などを詳細に記載した手紙を家族に手渡していて、家族がその手紙を主治医に見せることで医療との連携がうまく取れている。さらに家族の同行負担を軽減するために、歯科医療の訪問診療も事業所で受診できるよう現在調整中である。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職は本人の変化をケアマネに報告する。事業者内に専従の看護師はいないが、看護師の資格を持つケアマネのアドバイスにより、適切な受診や看護につなげている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院に際しては、かかりつけ医と連携し紹介状などの入手、家族への状況説明等を行い、不安の除去に努めている。入院してからも本人の状態把握や病院関係者との情報交換や相談のため面会して関係作りを行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重症化して終末期の医療ニーズが高くなった場合は事業所として支援に限界があることを入居前から本人・家族に説明している。日頃から入居者の状態については家族にお知らせし情報を共有して、状態が悪化して医療依存度が高くなってきた場合も早めに家族に報告している。	事業所として現時点では看取りに対応していないことを利用者家族に契約時に伝えて理解してもらっている。家族には重度化した時のことを考えて事前に次の手立てを考えてもらっており、利用者の状況が変化した場合、事業所から早めに家族に状況を伝えてスムーズに対処できるようにしている。看取りの指針作成は現在検討中で、訪問診療の医師と相談しながら職員研修を進めていく予定である。	看取りについて、今後利用者・家族からの要望も強まってくると思われるので、協力できる医療機関を見つける取組を促進するとともに、指針作成や職員研修にも早めに着手して実現に備えていくことが期待される。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	昨年10月に事業所内研修で緊急時の対応について学んだ。今年も10月に同研修を行う予定である。緊急時対応マニュアルを常に確認できる場所に掲示したり救急隊への情報提供表を準備したりしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回、地域住民も交えた防災訓練を実施し、消防署職員から指導・助言をいただいている。今年は8月に同訓練を行う予定である。	年に2回、昼と夜の想定で防災訓練を実施しており、二階からの避難経路としては建物中央にある大きな階段と、廊下の突き当たりにある外階段の2か所ある。防災訓練では、自力で歩ける利用者は4分で全員避難できた。課題であった車いすの利用者の二階からの避難方法についてはまだ検討中であり、考えている方法が有効かどうか今年中に実践してみる予定である。現在新型コロナウイルス感染拡大防止のため地域住民の訓練への参加は見合わせているが、落ち着いたら引き続き声かけしていきたいと考えている。	事業所開設時に作った災害対策マニュアルがそのままになっているため、定期的に見直し作業を行い、職員全体で常に情報共有することが望まれる。
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個人情報の守秘義務を契約書に明記し契約時に本人・家族に説明している。法人のプライバシーポリシーを玄関に掲示している。今年1月の事業所内研修で法人のプライバシーポリシー・職員倫理規定について学んだ。今年度も同研修を行う予定である。本人・家族の人権やプライバシーにも配慮しながら支援に努めている。	事業所内の職員間で情報を共有するのは良いが、利用者個人の話を他の入居者の前で話したり、事業所外で話さないよう、施設長・管理者は徹底して指導している。トイレや入浴介助でドアを開け閉めする際には利用者の羞恥心に配慮したり、混乱している利用者のプライドを傷つけないよう、上手に対処する方法を常に職員間で共有している。	

グループホーム ピオニー

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人から食事メニューや服装などの希望を確認して、調理や着替え介助時に本人の希望に沿って行うように努めている。余暇活動も本人の希望に沿って準備している(歌集・ぬり絵・生け花など)。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	「ゆっくり、いっしょに、楽しみながら…」という理念の下で、できる限りその人らしい生活が送れるよう、一人ひとりのペースを大切にして、それぞれが興味を示す物を探して、会話や余暇活動に取り入れている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	朝の着替えや入浴後に季節に合った衣類や本人が気に入った服を選ぶように声かけや援助をしている。また朝の整容や入浴後に髪を整えたり爪を切ったりしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	コロナウィルス感染防止のため食材の買い物は職員だけで行っている。毎日ホワイトボードにその日の食事メニューを記載し、献立や材料の説明をしている。できる方には食後にお盆・食器拭きをしていただく。	業者の栄養バランスが整った調理済み食材を利用することで職員ができるだけ介護に集中できるようにしているが、週に2回程度は、介護職員が全て手作りで食事を作り、特に男性職員が作るカレーがおいしいと喜ばれている。新型コロナウイルス感染防止のために外食の機会がなくなったので、利用者それぞれのリクエストにできるだけ応じられるよう、事前に好みを聞いて手作り食の時に順番で提供するようにしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々の体調や体重の増減を考慮しながら、それぞれの食事の形態や量を調整している。食事量・水分量は毎日チェック表に記載して過不足がないか確認している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	一人ひとりの残存能力に合わせて、優しく声をかけながら、口腔内・義歯の洗浄の支援を行い、清潔保持に努めている。今年7月に訪問歯科検診が行われた。		

グループホーム ピオニー

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	極力オムツを使用しないことを基本とし、排泄パターンを把握してトイレ誘導したり、残存能力に応じた支援を行い、本人に適した排泄用品を選んで使っている。	半分ほどの利用者が自分の意志でトイレに行ける状態であり、できるだけ現在の状態を長く維持できるよう支援に努めている。自立できていない利用者には、定時で誘導したり、職員がチェック表を確認して状況に応じて声がけするようにしている。便秘気味の利用者には、牛乳を朝と寝る前に飲んでもらうなどして工夫している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事には乳製品や食物繊維の多い物を提供して、体操や歩行などの運動を適度にするこで、便秘の予防に努めている。排泄チェック表で排便状況を把握して、ひどい便秘の方には医師に薬剤を処方してもらうこともある。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	毎日午前中に入浴している。職員と入居者が1対1でゆっくりと入浴していただいている。季節によってはゆず湯にしたり入浴剤を使ったりして、入浴を楽しんでいただく工夫をしている。今年は浴槽周りの手すりを追加して入居者がより安全に移動できるようになった。	週に3回のペースで午前中に入浴している。ほとんどの利用者が介助を必要としており、手すりにつかまりながら安全に湯船に入れるよう職員が支援している。気が進まない場合も、利用者が好きな洗濯物をたたむ作業を午後に一緒にしましょうと上手に声をかけて風呂場に誘導していて、髪や背中を洗ってあげると気持ちが良いと喜ばれている。また、利用者と一緒に砂時計を見ながら、30分程度の時間をかけてゆっくり入浴を楽しんでもらうようにしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	入居者がその日の体調に合わせてソファやベットでいつでも休息できるように臨機応変に対応している。室温・照明の調整を行い、冬季は湯たんぽを使用したりして快適な睡眠ができるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の説明書を確認して薬の目的や副作用を理解している。服薬チェック表に押印して内服を確認している。薬の変更は申し送り(口頭・ノート)と日誌で確認している。内服による症状の変化はケアマネから医師に報告している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	それぞれの能力に応じて居室のモップがけ・洗濯物たたみ・洗濯物干し・食器拭き等の手伝いをしていたり、一人ひとりに出来る範囲で脳トレ・体操・歌唱・生け花・短歌等を楽しんでいただいている。		

グループホーム ピオニー

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナウィルス感染防止のため職員と食材やおやつを買出しに出かけたり、気分転換を兼ねて職員と洗濯物干しやゴミ出しに行ったり、家族と外出したりするのは自粛している。今年6月にあじさい見学に出かけた(車内から観賞する)。	利用者は、従来は買い物と一緒に出かけたり定期的に事業所周辺を散歩していたが、新型コロナウィルス発生後は、安全を期して事業所の外に出て歩くことは中止し、車で出かけて車中で季節を楽しめるよう配慮している。春には桜、初夏には紫陽花を見に出かけ、帰りにお弁当を買って帰り、非日常を楽しんでもらった。酷暑が過ぎれば、外の空気に触れる機会を設けたいと考えている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現金の所持を希望していないか、現金の管理が難しくトラブルを避けるために所持を禁止せざるを得ない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	入居者が希望すれば、スタッフが間に入り家族と電話で話すことができる。入居者の手紙の投函も代行している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	快適に生活できるよう、共用空間は常に清潔にし、室温を調整したり、換気をしたりしている。季節に合わせた歌の歌詞・はり絵・カレンダーを壁に貼ったり、入居者それぞれが生けた花を目につく場所にかざったりして、季節感を感じられるようにしている。	もともと割烹料理店であった建物の二階をリノベーションした造りで、利用者が日中過ぐすりビングダイニングは大きなガラス窓から太陽光が降り注いで明るい。現在利用者は全員女性で、職員手作りの飾り物や利用者が作成した塗り絵などが入り口やリビングダイニングの壁にたくさん貼られていたり、利用者が活けた生け花が随所に飾られていて華やかな雰囲気である。窓のないトイレには、熱がこもらないよう扇風機が置かれている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	一人になりたい時はフロアのソファや居室に誘導して落ち着けるように支援している。フロア南の窓際の椅子に座りのんびりと外を眺めることができる。一方で、フロアで気の合った入居者同士が過ごせるよう、座席を決めている。		

グループホーム ピオニー

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	馴染みの物品や趣味用品を持参していただくことで安心されている入居者もいる。例えば家族の写真を飾ったり趣味の短歌集を並べたりなじみの家具を使ったりしている。家族から自宅でのベッドの位置を確認してなるべく自宅の間取りに近づけるように配慮している。	改築前は座敷(宴会用大広間)であった造りを生かそうと、居室は洋室でありながら障子が入っていて、一般家庭の一室のようで、高齢者には馴染みやすいだろうと感じられる。利用者はそれぞれ好みのベッドやタンスを持ち込んでいて、家族の写真を飾ったり、家族からのプレゼントのぬいぐるみやクッションなどが置かれた部屋もある。利用者がトイレに行くのに慌てて転倒しにくいようにベッドの配置を変えたり、居室のエアコンの設定に混乱する利用者には、天井に装飾を施したように布で覆い、エアコンが見えないよう職員が工夫している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物内を整理整頓して通路に障害となる物を置かないようにしたり、通路に手すりを設置したり、むき出しの配管にクッションを巻いたりして、事故防止に努めている。トイレや居室がわかりやすいように入りに表示を付けている。		